太平記の名義及びその生成發達變遷の由來

本會會員
文學博士　高木　武

一、太平記の名義　吉野時代の爭亂を叙寫した本書に「太平記」の名を冠してあるのは不適當のやうに思はれるが、これは爭亂が一時治まつて京都附近が太平になつた時、この事變を叙寫した所から來てゐると考へられる。「太平記」の名稱は最初から用ひられてゐたものであらう（洞院公定日次記・公文慶承法眼狀・難太平記）。

二、太平記の作者　小島法師を太平記の作者とするのが普通である。小島法師の人物事蹟は明らかでないが、身分は低くて名匠の譽があり、吉野朝に肩を持つてゐて叡山の關係者であつたらしい（洞院公定日次記・難太平記・太平記）。併し、本書は再々改修されて大成してゐるから、本書の作成に關與した人物は幾人かあつたものと思はれるが、小島法師以外には信ずべき人物は見當らない。

三、太平記の生成發達變遷　太平記は興國五年（康永三年）頃から正平元年（貞和二年）頃に至る數年間に三十餘卷生成したやうであるが、これは現存太平記とは頗る趣を異にする物であつたらしい（難太平記・園太曆・鶴岡社務記・常樂記・大乘院日記

目錄・如是院年代記・太平記天文本・銘肝腑集鈔の太平記遺編）。その後、本書は正平十三年（延文三年）頃から同十六年（康安元年）頃に至る數年間に改修せられ（神田本・西原院本・寶德本・東京帝國大學本）、最後に建德元年（應安三年）七月以後、建德二年（應安四年）三月迄に大成したらしい（太平記諸本・師夏記・東寺執行日記・後愚昧記・皇年代略記・歷代皇紀・皇胤紹運錄・續史愚抄）。最初は三卷から成つたものもあつたらしいが、三卷本があつたとすれば、それは北條氏滅亡後、建武中興頃までを纏めたものであつたらう（銘肝腑集鈔の太平記遺編）。

四、太平記卷篇の變改　太平記には建武中興迄を纏めた三卷くらゐの簡單な物があつたらしいが、京方と吉野方との大爭亂を主材とした太平記は、最初三十餘卷ほど作られ、それが更に改修大成せられて四十卷となつたもので、本書の卷篇は四十卷が本體である。異本中には四十一卷本（前田本）や四十二卷本（內閣本・京都帝國大學本）もあるが、これらは編次に改修を加へたもので、太平記本來の姿ではない。

また現存太平記は、すべて卷二十二の內容を闕失してゐる。古本と目せらるゝ諸本（神田本・黑川本・西原院本・島津本・南都本・北條本・寶德本・東京文理科大學本・松平本・東京帝國大學本・梁田本等）は、何れも卷二十二を闕いてゐるが、たま〳〵卷二十二を有するもの（今出川本・今川本・毛利本・天正本・金勝院本・前田本・吉川本・義輝本・京都帝國大學本・內閣本・流布本等）は、何れも卷二十三・二十四の中から內容を抽出し、卷二十二の內容として充當したものであるか、または卷篇を改修して卷二十二の闕失を補充してゐるものであつて、本來の卷二十二の內容を有してゐるものは一本も現存してゐないのである（太平記諸本・參考太平記・太平記聞書・鹽尻・太平記理盡抄）。